

場のデザインによって創発する訪問介護の創造性
-認知症高齢者とヘルパーによる冷蔵庫確認場面の相互行為分析-
**Creativity in Home Care Emerging from the Design of the Setting:
An Interactional Analysis of Refrigerator Checks by Older Adults
with Dementia and Home Helpers**

細馬 宏通
Hiromichi Hosoma

早稲田大学
Waseda University
hhosoma@waseda.jp

概要

本研究は、訪問介護における冷蔵庫確認場面を対象に、認知症高齢者とヘルパーが家庭内の空間配置や物の配置に応じて介護活動を組み立てる過程を相互行為分析により明らかにする。各事例のマルチモーダル分析の結果から、冷蔵庫本体、庫内、食材への共同注意が、指さし・視線・身体動作・物の操作を通じて段階的に維持されることが示された。また、扉や引き出しのデザインが身体配置や覗き込み方を方向づけ、利用者がその場の行為連鎖の創発に能動的に参与していることが分かった。

キーワード：会話分析、認知症、介護、相互行為、マルチモダリティ

1. はじめに

家庭の物理的空間や建築は、家族のメンバーが日常活動のなかでどのように移動し、相互行為し、注意を向けるかを導くトポグラフィーを提供し、家族のルーティンを形づくる(Tulbert & Goodwin 2011)。それぞれの家庭は、異なるレイアウト、異なるデザインを施された多様な場であり、訪問介護とは、こうした場において、利用者とヘルパーとが相互行為を行うという実践である。

ヘルパーと利用者が次に何を見て、何を取り出し、何を判断するかは、台所の広さ、冷蔵庫の位置、食材や調理器具の置かれ方などによって方向づけられる。ヘルパーは、それぞれ異なる空間配置、生活動線、物の置き方をもつ家庭を一日何軒も訪問し、その場の条件に即して、利用者とともに調理や掃除、整理などの作業を行う。

この意味で、訪問介護におけるヘルパーの仕事は、あらかじめ決められた手順を家庭に適用することではない。むしろ、それぞれ異なるデザイン環境のなかで、利用者の注意や身体の向き、発話、物への手の伸ばし方などに応じながら、その場に適した行為連鎖を利用者とともに作り出していく実践である。

る。

こうした実践の基盤となるのが、共同注意(Tomasello 1995)である。共同注意は一般的に、開始側が何らかの対象を指し示し、反応側がその対象へ注意を向けることで成立する。また、お互いがどこに注意を向けているかをモニターしあうことによって、注意の共有はより確かなものになる。しかし注意機能に問題を抱える認知症高齢者の場合、単一の指示詞や指さし動作で共同注意を達成することには困難が伴う。この問題を解決するためには、協働活動を細かい単位に「分割化」(Hydén, Ekström & Majlesi 2024)することが有効であるとされている。

本研究では、厚労省で訪問介護における身体介護業務として指定されている「認知症の高齢者の方と一っしょに冷蔵庫のなかの整理等を行うことにより、生活歴の喚起を促す」(老計第10号、厚生省老人保健福祉局通知 2000年)という活動に注目し、冷蔵庫の庫内への共同注意が利用者とヘルパーとの間でどのように達成されているかを分析する。そのことで、両者の共同注意は家庭内における冷蔵庫の位置や構造によってどのように変化するか、そこでは共同注意はどのように分割化されているかを考察する。

2. 方法

アルツハイマー型認知症初期と診断されている高齢者CとヘルパーHとの訪問介護場面(合計50分)を分析した。二人は主に共同調理を行っており、その中からHが冷蔵庫の中身を確認する10場面を抽出した。このうち、Hが庫内の食材についてCに対して発話した例は8例、CさんとHが庫内への共同注意を行った例は6例、取り出された食材への共同注意を行った例は5例であった。これらの事例についてC、Hの発話、視線、身体動作をELANコー

ディングし、事例分析を行った。

本発表では紙面の都合で、そのうちの2例（について分析結果を示し、考察を行う。

3. 結果と考察

3.1 事例1「じゃがいも」

01 C: じゃがいも#1ね[えよね:]
 02 H: [あじゃが]=
 03 H: =いももうちょっとある#2
 04 +(0.3)*(0.3)
 h: +右手で冷蔵庫の下段を開ける--->
 c: *冷蔵庫下段見ながら起き上がる--->
 05 H: 芽が出ちゃう**からこっち入れてあるんだよ + #3
 h: -->+じゃがいもを探る +
 c: --> *前進しながら冷蔵庫下段見る--->
 06 H: [はい.]
 07 C: +[あ:じゃあ]それ*使おう かな. ** #4
 h: +じゃがいも取りだし手渡す +
 c: -->*じゃがいも受け取る*
 08 H: うん
 09 (0.3)
 10 C: あこれ男爵かな
 11 (1.1)
 12 H: どうだろ#5
 13 (0.3)

図1. 事例1のトランスクリプト。動作の記法はMondada (2018) による。

事例1は、利用者Cが食材のじゃがいもを探索するためにカウンター下を覗き込み始めると、ヘルパーHが冷蔵庫の最下段を開けてじゃがいもを発見し、Cに手渡すやりとりである。

Cが「じゃがいもねえよね:」(1行目)とカウンター

下に注目している最中に、Hは「あじゃがいももうちょっとある」(2-3行目)と冷蔵庫に体を向け、右手で冷蔵庫の下段を開ける(4行目)。CはHの発話の直後に冷蔵庫の下段に視線を向け直しながら立ち上がる(4行目)。ここで、HとCはともに庫内に視線を向けており、庫内への共同注意が達成されている。HはCが視線を庫内に向けているまさにそのときに、じゃがいもの袋を取りだし手渡す(7行目)。CはHからじゃがいもを受け取ったあと、「あこれ男爵かな」とラベルを見ながら品種を確認する(10行目)。するとHは最下段の引き出しから顔をあげ、Hの持っているじゃがいもに注意を向け「どうだろ」と言う。この時点では、二人はじゃがいもに共同注意を向けている。

図2#3-#5におけるCの立ち位置から分かるように、最下段の引き出し式の庫内に対して共同注意を行うときには、Cは冷蔵庫の正面に立つ必要はなく、離れた位置から庫内を見下ろしている。

庫内への共同注意からじゃがいもの袋についたラベルへの共同注意へと遷移する過程で興味深いのは、冷蔵庫の最下段を覗き込む際には、Hが先に冷蔵庫に注意を向けて共同注意の開始者となりCが反応者となっていたのに対し、Hがじゃがいもを袋ごと手渡したことで、Cの注意がじゃがいものラベルへと移り、その結果、Cが共同注意の開始者となり、Hが反応者になっていることである。一連の活動の中で、Cは反応者から開始者へと役割を変化させ、活動に対してより能動的に関わるようになっているのである。

3.2 事例2「味噌汁」

事例2は、CとHが冷蔵庫内の味噌汁の鍋にお互いの注意を向けて行く過程である。



図2. 事例1における利用者CとヘルパーHの位置取りの変化。Cがじゃがいもを探索するためにカウンター下を覗くと(#1)Hは冷蔵庫最下段の引き出しを開け(#2)、CはHの声と動作に導かれてHとともに庫内を覗き込む(#4)。Hはじゃがいもを取り出して、Cに渡す(#4)。Cはじゃがいもの品種を確認するためラベルを読み始めると、Hはそれを覗き込む(#5)。#1-5は図1のトランスクリプト内の記号に対応している。

[illegible]

図 3. 事例 2 のトランスクリプト。ヘルパー (H) が冷蔵庫を開け、その後、利用者 (C) が庫内の鍋を取り出し、蓋をとってその中身を確認する。

トランスクリプトの 1 行目で、ヘルパー H は冷蔵庫に近づきながら上段の扉に手をかける (図 1 Shot 1)。2 行目「ここにさ:あ」を言い終わると同時に扉を開け、上段の中を指さしながら 4 行目「たぶんもう」を発話する。一方、利用者 C は、2 行目が終わった段階では、冷蔵庫とは逆方向にあるコンロに向かって歩いており、3 行目の沈黙で冷蔵庫側に向けて振り向き始め、4 行目「たぶんもう」が終了する時点でようやく冷蔵庫と H に注意を向ける。この時点で、冷蔵庫自体への注意は達成された。

興味深いのは、H が 5 行目の沈黙部分で視線を庫内から C へと向け、C が冷蔵庫に注意を向けているのを確認していることである。ここで、二人の注意は、単純な共同注意から注意共有へと移行したと言える。

次に 5-7 行目で、H は「あついから：」と言いながら

庫内上段の鍋に右手を伸ばし、CはこのHの右手の動きを追うように首を右に傾けて庫内に注意を向ける。言い換えれば、この時点で、二人の共同注意の対象は、冷蔵庫自体から庫内へと移行した。

ヘルパーHは7行目の沈黙の間に、今度は左手で庫外のコンロ側を指さす。指さしの頂点はちょうど8行目の冒頭「そこに」と一致している。この指さしと発話の共起によって「そこに」はコンロ側であることが示されているため、8行目のHの発話は「そこに (=コンロの上に) 出しっぱなしで悪くしちやいけないうてことだと思う」と解釈できる。

この 8 行目の終結部で、H は興味深い動きを行っている。まず、利用者 C を見て「と思う(.)ここにも」と言いながら、鍋を指さしたまま上体を退く。この動きは C によって見られており、この時点で、H と C は H の動作に対する注意共有を達成している。さらに H は、鍋に対する指さしを維持したまま、うしろへ 2 歩下がりがりながら 10 行目「これお味噌汁のお鍋じゃない?」を発する。この動きに導かれて、C は首を右前に移動して、庫内をさらに覗き込むようにし、さらに 2 歩前進しながら右手を冷蔵庫庫内に向かって伸ばす。

ここで重要なことは、冷蔵庫の上段扉は左開きになっており、庫内の奥を覗き込むためには、冷蔵庫の正面に立たねばならぬということである。10 行目の H による指さしを伴った後退は、単なる移動であるだけでなく、冷蔵庫正面を空け、C が正面に移動して庫内の奥を覗き込むためのスペースを作る動作となっている。C はこの H の動作のあとに、いわば誘われるように冷蔵庫のそばへと移動し、右手を庫内へと伸ばしたのである。

12-13 行目で、利用者 C は「ふん、たぶんそうだと思う」といいながらヘルパー H によって指さされた上段の鍋へと右手を伸ばし、鍋を取り胸元に引き寄せる。C が蓋を開けて中身を見ると、H もまた中を覗き込みながら 14 行目で「ね」と言い、C はすぐさま 15 行目で「うんそうだ」と応じる。

注目すべきは、事例 1 同様、10-15 行目で、共同注意の開始側の担い手が交替していることである。9 行目まで、冷蔵庫自体や庫内の鍋への共同注意は H によって開始されていた。しかし、10-15 行目では、C が自ら鍋を手にして蓋を開けることによって、鍋の中身への共同注意を開始している。

この開始側の交替は、介護における自立支援の達

成において重要な意味を持っている。もし H が冷蔵庫の中に発見した鍋を取りだして C にその中身を示したならば、動作はよりスムーズになったかもしれないが、共同注意は常に H により一方的に開始されて終わったことだろう。C が自発的に鍋を取りだし、自分で中身を確認することで、行動連鎖は、まず C が共同注意の開始側となり、H が C に反応してその中身を遅れて確認する形になっているのである。

4. 議論

事例 1 と事例 2 の比較から、冷蔵庫のデザイン（引き出し式／扉式）によって、利用者とヘルパーの共同注意のあり方は明らかに異なることが分かった。引き出し式の場合、両者は上から中身を覗き込むことになり、利用者は冷蔵庫の斜め前から中身を確認することができた。一方、扉式の場合、庫内を確認するためには、利用者は扉の正面に立つ必要があり、ヘルパーは利用者の位置取りを促す動きを行うことによって、冷蔵庫から扉前へ、扉前から庫内の特定の事物へと共同注意を段階に達成する必要があった。

事例 2 における多段階の共同注意は、冒頭で述べた「分節化」の一種とみることもできるだろう。ただし、ここで重要な点は、事例 2 ではただ注意の過程が分節化されただけでなく、冷蔵庫→庫内→庫内の鍋という風に、1 つの共同注意を基盤として次の共同注意へと次第に注意を累積化 (Goodwin 2018) することで、冷蔵庫の中身の確認へと至った点である。冷蔵庫という物理的存在は、単にその構造の複雑さによって利用者—ヘルパーの共同注意を分節化させる一方で、複数の共同注意を累積するための基盤を提供してくれるのである。

5. 文献

- Goodwin C (2018) *Co-Operative Action*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hydén, L, Ekström, A., and Majlesi, A. R. (2024). Intercorporeal Collaboration: Staging, Parsing, and Embodied Directives in Dementia Care. *Health* 28 (3): 352–71.
- Mondada, L. (2018). Multiple Temporalities of Language and Body in Interaction: Challenges for Transcribing Multimodality. *Research on Language and Social Interaction*, 51(1), 85–106.
- Tulbert, E., & Goodwin, M. H. (2011). Choreographies of attention: Multimodality in a routine family activity. *Embodied interaction: Language and body in the material world*, 79-92.